

# 論説文読解における「書き手の意図」を 明確にする過程の意識付け ー「探求マップ」を用いた文章構成の精査からー

学籍番号 189966

氏名 今村 和樹

主指導教員 田中 満公子特任教授

## 1. 序論

### 1.2 節タイトル

全国的な動向として高等学校では資質・能力ベースの単元観が打ち出され、新科目「論理国語」において「書くこと」や「複数テキストを読む」という言語活動を通じた単元案が先行研究として出ていることを確認した。斎藤は「探求マップ」を用いた論文執筆指導を行い、渋谷は論説文を扱う際の順序性について示唆を与えている。このような論説文読解の流れに立脚しつつ、「論理国語」において打ち出されている教材の「文章構成」と「筆者の意図」との関係性を踏まえた読解の習得をねらいとする授業を扱うことが求められている。これを受け本研究では、上記の力の習得に資するために作成した補助教材を用いて授業実践を行い、その有効性を検証することを目的とする。

## 2. 基本学校実習Ⅰ・Ⅱ

2章では基本学校実習Ⅰ・Ⅱを扱い、実習校の生徒観・学校観を明らかにするべく授業観察や5名の教員インタビュー、授業実践を行い、実習校が抱える課題と研究課題のすり合わせを行った。基本学校実習Ⅰでは学校全体から見た視点で国語科に求められているものとして「グローバル人材」を目標とした「発信力」と呼ぶべきものがあることがわかった。基本学校実習Ⅱでは逆に国語科内部から見た国語科に求められているものとして入試に対応する力、特に「読むこと」領域の力が重視されていること、また教員の自律性が求められる校風があることを確認した。2つの学校観を総合することで、「論理国語」という新科目において発信を見据えた「意図」と「構成」のつながりを扱う実践例をつくるのが、学校教育目標の中で国語科の果たす役割に資すると考えた。

本研究は「論理国語」における文章構成と意図との連関を意識させる授業活動例を提案することに目標を置いていたが、実習校の実情を踏まえると以下の3つの点が必要であるとした。

- ①国語科としての見方・考え方を踏まえた資質・能力を「コミュニケーション能力」の中で発信を中心にするを明確にし、「目指す生徒像」とのつながりとして主張には論理構成が必要であるという意識・態度を習得することを目標とする。
- ②大学入試へつながる基礎学力として「反例」「対比」などの論理構造を理解し、その構造が文意に与える効果について説明できることを授業で「つけたい力」に設定する。

③段落ごとの内奥把握は得意とするが、文章全体を通じた筆者の意図に課題を抱えている生徒の現状に対応する。

### 3. 発展課題実習Ⅰ

学習指導要領にある「文章構成や論理の展開、表現の仕方について書き手の意図との関係において多面的・多角的な視点から評価すること」活動を読解プリントを用いて行い、その授業効果を検証する。中でも今回は渋谷「通読→段落ごとの精読→通読」のうち「段落ごとの精読」を中心に、教材の構造である「対比」の読解を単元目標として実践を行った。実践の評価は「生徒が書き手意識を持っているか」「筆者の意図を読み取れているか」「構成が論旨に与える効果を理解できているか」の3つの観点から行い、それぞれ質問紙・プレテストとポストテストを用いて測定した。結果として「書き手意識」がわずかに向上したこと、書き手として「対比」があまり意識されていないことが質問紙調査から判明した。またプレテスト・ポストテストの結果からはルーブリック観点①文章構造(対比)や合計点において有意に得点の上昇がみられた。プリントに着目したアプローチが一定程度油工であったことを踏まえ、この成果をより伸ばしつつ、課題となっていたプリントの細切れさを改善するためより視認性の高い形式を採用することを課題とした。

### 4. 発展課題実習Ⅱ

4章では発展課題実習Ⅰでの反省を踏まえ、視認性の高い形式として「探求マップ」を用いた授業実践とその効果検証を行い、研究のまとめを行った。しかし質問紙調査で初めて「書き手意識」が大幅に上昇したものの、質問紙のほかの項目やプレテスト・ポストテストで測った「反例」の読解項目については成果を得ることができなかった。書き手意識上昇の要因として、探求マップで主張の論理の流れを追うことで、結果としてその背後にいる、文章の作り手としての作者の存在を意識するようになったことが考えられる。このように推論形式を扱うことはその背後にいる作者への意識、つまり言語を操作する人物に対する意識を喚起する効果があることが予想される。一方で介入のタイミングや探求マップにかかる時間配分を増やすなど、授業実践の課題とともに、研究デザインとしてクロスができなかったことが介入と結果のつながりの明確さを欠く原因となった。

### 5. 結論

1章から4章の活動を通じ、当初の目的であった「文章構成」と「筆者の意図」を踏まえた文章の読解に関する意識づけは、探求マップや授業プリントの工夫などによって意識が上昇することが確かめられた。特に発展課題実習Ⅰで「比較」の読解事項が上昇したことや発展課題実習Ⅱで「書き手意識」が優位に上昇したことを踏まえると、視認性を意識して「推論形式」「論理の流れ」などを意識した授業進行や補助教材作成をすることはある程度有効性があり、今後も可能性を残しているといえる。研究の結果からプリント教材を使って論理の道筋を追うことで書き手への意識が高まること示されたため、今後もプリント教材の可能性を継続して考察していく。本研究で課題として残された「対比」と「反例」という異なる文章構造への対応のために改良を加えることや、質問紙の自由記述で一貫して課題であった「書くこと」に向けた活用可能性にも目を向け、「書く」パフォーマンス課題を中心にした単元設計の中でプリント教材を試すことを検討している。